

# 花祭りと山遊び

飯島 吉晴

サクラをはじめ、さまざまな花がいつせいに咲き誇る四月には、花にまつわる祭りや行事が多い。四月八日の「灌仏会」<sup>かんぶつえ</sup>は、その代表的なものである。四月八日はお釈迦さまの降誕した日とされ、仏教では正式には灌仏会・仏生会・浴仏会・竜華会などと称し、多くの花々で飾られた小さな御堂の中に釈迦の誕生仏を安置して甘茶をかける行事が行われる。この法会はすでにインドや中国で催されていたものだが、日本にも古く盂蘭盆会（盆行事）とともに伝来したらしく、『日本書記』の推古天皇十四年（六〇六）の条には「是の年より初めて寺毎に、四月八日、七月十五日に設齋す」とある。わが国では灌

仏会は諸大寺を中心にはじめられ、奈良時代には花御堂<sup>はなみでら</sup>に金銅製の誕生仏を置き香水をかけることも行われたという。宮中でも承和七年（八四〇）から灌仏の儀礼<sup>ぎれい</sup>が修されたという。これは比良山で修行した静安によってはじめられたもので、在家での灌仏会の最初のものであるとされている。以後、灌仏会はひろく催されるようになったのである。

灌仏会は、摩耶夫人<sup>マヤノキミ</sup>が藍毘尼園<sup>ランビニエン</sup>（ネパールのタライ地方にあった離宮）の無憂樹<sup>むゆうじゆ</sup>の下で釈迦を生んだという故事に基づく行事で、釈迦は生後まもなく自ら七歩あゆんで、天と地を指さし「天上天下唯我独尊」といったとさ

れ、この時九竜が天から香水を降り注いだと伝えられている。この故事は「太子瑞応本経」その他の仏典に語られているが、灌仏会の花御堂は藍毘尼林をかたどったものとされ、釈迦像に竹柄杓で甘茶を注ぐのは九つの竜が天から清浄な水を吐いて産湯をつかわせたことによる。

平安時代には、宮中の清涼殿に灌仏台を二脚立てて浴仏会が催されたが、この灌仏台は山と蓮池を剝物で作って金銅の釈迦像を安置し、青竜赤竜を置き、五色の糸を水に見立てたり、五色の香水を池に入れるなどして盆石風につくった祭壇であったという。なお中国の『荆楚歳時記』は、六世紀頃の揚子江中流域の歳時風俗を記録したもののだが、「四月八日、諸寺、齋を設け、五色の香水を以て浴仏し、共に竜華会を作す」とある。ここでは釈迦の誕生（浴仏）と成道（竜華会）とが混交しているが、同書にはまたこの日に荆楚地方では絹や蠟で蓮の細工物を作る風習があったことも記されている。

灌仏会は、俗に「花祭り」とも呼ばれているが、これは浄土宗で用いたものを各宗派で採用したもので、この

呼称は近年になって新しく成立したのである。灌仏会は、花御堂を色とりどりの花々で飾り、甘茶や花供御団子（通称は鼻糞団子）をもらえる楽しい子供中心の行事であることから、花祭りの名がふさわしいとして、一般にも使われるようになったのである。戦前には、仏教各派が合同で稚児行列・合唱・舞踊などさまざまなアトラクションを含んだ盛大な催し物として、東京の日比谷公園や大阪の四天王寺などで花祭りを行った。今でも寺院や幼稚園によっては、白象に花御堂をのせたものを中心に花行列を作って稚児や園児たちが引いてあるいたり、また農村では子供たちが中心になって営む伝統行事になっているところもある。たとえば、埼玉県秩父郡吉田町上吉田塚越という戸数約七〇戸の村では、かつては小学校高学年の男子が花祭りの担い手となって、月遅れで祭りを行っていたが、近年では女子も加わり小学生全員が参加するようになっていた。五月七日の晩に、子供たちは村内の熊野神社で花御堂の屋根を月初めから大量に摘み集めてきたさまざまな植物の芽や花で葺き、飾りつ

けをする。花御堂が出来上がると釈迦像を安置し、男子のみが拝殿に一晚こもってお守りする。翌八日の早朝、甘茶をわかけた後、子供たちは花びらを撒いて道を清めながら裏山の山頂にある薬師堂に花御堂や仏像をもって参る。薬師堂に着くと、残りの花をすべて撒き、釈迦像をたらいに移して甘茶をかけて拝むという。この村では、花祭りは一名藤の節供ともいい、釈迦の誕生を祝うだけでなく、災厄除けの一面もあったようである。かつては、灌仏会の甘茶で墨をすり、「昔より卯月八日は吉日よ神さけ虫を成敗ぞする」という呪文を紙に書いて戸口に逆さに貼れば、長虫が家に入らないとか、蚊帳の釣り手にその紙を結びつければ悪虫が中に入らないなどと各地でいっていた。

このように、四月八日の灌仏会は、仏教的色彩の濃い行事として古くから催されてきたのである。しかし、その一方で、民間には卯月八日・朝八日・神の日・花の日・天道花・夏花・花折り初め・山登り・野山行きなどと称し、釈迦誕生の仏教行事とは直結しないものも実際に

多いのである。たとえば、この日に野山に行つて花見をしたり飲食をして山遊びをする風習は、東北から九州の各地に分布している。またツツジ、石楠花、しきみ檜、山吹、藤、ウツギ、卯ノ花など山から取つてきた季節の花を軒先にさしたり、竹竿に結わいつけて庭先に立てたりする天道花や八日花の風習は、西日本中心にみられる。霊山の山開きの日として、精進登拝したり、山の神や霊山の神社の祭日としている事例は、東日本に多くみられる。

この他、新仏の墓参りや先祖供養をする風習もある。兵庫県氷上郡ではこの日を「花折り初め」といって他家に嫁いだ子女が新仏の墓参りのために帰ってくるという、大阪府南部では地獄の釜の蓋を開く日だともいっている。また熊本県益城地方では、卯月年忌といって仏前に花を供え檜で水を手向けたという。

五来重は、仏教行事としての仏生会のほかに、天道花、先祖供養、成年式（成女式）といった三つの民俗が結合して卯月八日の花祭りになったのだと論じている。卯月は陰曆の四月の別名で卯の花の咲く月という意味だ

が、季節でいえば春が終わり初夏の頃をいう。現在では農耕開始が年々早められたり、農作物は通年出回っていて、季節感はずますます希薄になっている。その結果、農事暦として自然の推移や農家の生活と深く結びついていた陰暦は、一部を除いてほとんど使われなくなり、すべてに新暦が採用されるに至っている。地域によっては、一月遅れで民俗行事を行って季節のずれを調節しているところもある。花祭りも、元来初夏の行事であったのである。小学唱歌「夏は来ぬ」の一節に「卯の花のにはう垣根に ほととぎす はやも来鳴きて」というのがある。農家の生け垣の卯の花が白く咲き、ホトトギスの鳴く光景は、日本の初夏の典型な風物詩であった。ホトトギス（時鳥）は勸農鳥とも書くように、その鳴き声は古くから八十八夜前後（新暦の五月上旬）の農耕開始を告げる目じるしとされてきたのである。卯月八日は、ちょうど春から夏へ季節が交替し、罪が消え、万物が生成する時節であり、釈迦その他の諸仏諸神の誕生更新にふさわしい時でもあったのである。月の八日はまた薬師の縁

日でもある。とくに東日本では四月八日に薬師に参る例が多くみられるが、薬師には目の祈願や片目伝承がしばしば伴っていて、この日が大きな時間の折り目であることを示している。四月八日はコト八日などと同様に、民間では年や季節の交替する重要な節目とみなされてきたのである。

名古屋の熱田神宮では、陰暦四月八日（今は五月八日）に「花の撓神事」といって、東西の楽所に農人形が飾られ、参詣人はかつてその形から東では稲作（田所）、西では綿作（畑所）と蚕の豊凶を占ったといい、現在では豊年祭になっている。昔は、社家はじめ戸ごとに卯の花をさしたともいう。花の撓は、祭りの飾りものである人形や農機具などの模型を意味しているが、撓は元来は頭（当）で頭屋行事に由来するものであろう。この時期には、花盛祭、花摘祭、花会祭、献花祭、花喚祭、花祭り、花供養などと称し、神仏に花を献ずる神事が各地の社寺で行われたが、花の撓神事もやはり献花の儀式の一つであった。なお、折口信夫は、「花という語

は、簡単に言うと、ほ・うらと意の近いもので、前兆・先触れというくらいの意味になるらしい」と述べている。花は、年占に関連し、あらかじめ豊凶を示す先駆けとみられたのである。そのよい例が、サという田の神の神座（クラ）を意味するサクラであり、その花の咲き具合や散り方などで農事をはじめさまざまなことを占ったのである。この為、厄除けのために鎮花祭を行ったのであり、花見や山登りも単なる娯楽ではなく神事とされたのである。

卯月八日に、村人がこぞって山登りし、一日楽しく花見や飲食して過ごす風習も各地にみられる。岩手県では花見八日などといって野遊びにでかけ、また徳島県の剣山山麓では「山いさみ」といって海の見えるような高いところに遊びに行くという。この日には山に登るだけでなく、花を摘んでくることも広く行われている。新潟県刈羽郡では、もとは盛装して近くの人に登り、藤の花を取ってきて仏壇に供える風習があった。比叡山はかつては女人禁制の山であったが、旧暦四月八日から七月八日

までの一夏の間は山麓の花摘社<sup>はなむし</sup>まで女人が参拝し花を仏に供えるのが例になっていた。これは開山伝教大師の母親が花摘社まで対面にきた故事に基づく風習で、江戸末期まで行われていた。近畿各地では、四月八日に高花、立花、八日花、天道花などといって、今でも家の庭先に季節の花々を竹竿に結びつけて高く掲げる風習がみられる。この花は、お釈迦さま、月、太陽（天道・日輪）、新仏（祖霊）などに供えたものだというが、花は元来サクラに示されるように神霊が宿るものまたは神霊の依代<sup>よりと</sup>であった。したがって、この日に山野に行く目的の一つは、神霊の依代としての花を取ってくることにあった。迎えてきた花を高く掲げるのは、神霊を招きおろすためでもあった。山に宿る神や祖霊を里に迎えたり、家に招くために花を高く立てたのである。

ところで、山から折ってくる花は現今ではツツジや山楠花などの季節の花が多いが、本来は常緑の常磐木であり賢木（サカキ）とも呼ばれた「櫛」であったという。どんな花にしる、急に萎むような花は用いないのが共通

の傾向であった。櫛は今はもっぱら葬式や墓参だけの花とされ、神事に使用される櫛とは対比的であるが、独特の香りをもつ櫛はかつては香花とか花柴とも称され、神霊の依代として門松に用いられることもあったのである。人の霊魂は死後には山にのぼると古来信じられてきたので、櫛は山から祖霊を招くのに最もふさわしい樹木であるといえる。群馬県の赤城山東麓の村では、新仏のあった家では四月八日に死者に会いに赤城山に登ったといい、また播磨の法華山の近くの村ではやはり新仏のあった家ではこの日に山に登り、賽の河原に櫛を置いてきたという。卯月八日には、先祖（新仏）供養や墓参する行事が多くみられ、花折りは墓参とも関係が深いのである。花は、今でも、どちらかといえば仏や死者との結びつきが強いものといえる。

和歌山県有田地方では、四月八日に天道花とは別に、家の人数だけ竹の花筒をたてて卯の花をさし、七月十三日まで毎日新しい花に取り替えたという。これを「夏花」と称している。夏とは通例僧侶が安居する四月十五

日から七月十五日までの九十日をいうが、中世には四月八日の仏生会までさかのぼって入夏とするようになった。修験山伏の夏の修行も花供入峰といわれ、これは仏教でいう夏安居の一夏九旬（四月十五日から七月十五日までの九十日）の期間毎日、山伏が吉野、熊野、白山、立山、羽黒山などの霊山の諸堂社に花を供える行をいう。山伏が一名花衆とか夏衆と称されるのは、山伏が古く花を摘んで山の神にまつるために入峰したからだといふ。あるいは山伏が夏に峰入したからだともいふ。山伏の夏の峰入が四月十五日から仏生会の四月八日に移るとともに、夏行は多くの場合六月十五日で終えて山を降りた。この出峰の日にはよく蓮花会といって、蛙とびなど夏行の成果を競う験くらべが行われたのである。

日本の民間信仰では、先祖の霊は山にとどまり、正月や盆、春秋の彼岸、四月や十月などに年神や田の神として里に降りてきて子孫にまつられ、家や農耕を守ると信じられてきたので、山の神もその本質はやはり家の祖霊であるとみられてきた。四月八日を山の神の祭日として

いる例は、長野県北安曇郡や静岡県庵原郡など各地に分布している。奈良の大峰山では四月八日を戸明けと称して山開きを行っており、この日に浜降りや祭礼をして神が山と里、里と海などを去来する日としている地域も多い。鹿児島県の喜界島では、四月八日をソーリといって田の神が高い所から里に降臨する日としており、この日には田畑に入らず休日になっているところも少なくない。農耕を開始する卯月のはじめに神霊に捧げられる天道花は、いわばこの日に去来する祖霊や田の神の依代として立てられたのである。

兵庫県南部では、四月八日にツツジ、石楠花、櫛などの季節の花を庭先に高く掲げる行事を高花と称しており、花は翌九日に降ろしてしまっておき、雷鳴の日に火にくべると雷除けになるといふ。大阪府下では、この花を取っておいて家出人があつた時に燃やせば、煙がその行方を示すという。また和歌山県有田郡では竿を高く掲げれば男児が生まれるといふ、さらに花を十字にくくりつけたり花にスリコギを入れておけば男児が生まれると

か安産であるという地方もある。このように、天道花には一定の呪力や生命力が認められていたのであり、卯月八日の民俗の基底にはこの花に込められた力を獲得しようとする意図が隠されているのである。

五来重は、卯月八日の山遊びや山登りには成年式や成女式の意味があつたといふ、女子は山籠りすることで結婚の資格をもった一人前の女となり、山から降りる時に成女のしるしに挿頭花を挿してきたのだと述べている。

この神の依代の花で作つた髪飾り（はね鬘）を竿につけて立てたものが纏頭花とよばれ、のちに誤つて天道花となつたのだという。折口信夫も、田植えの早乙女を選定するために卯月半ばの一日に処女が山籠りして物忌生活をしたのだが、のちには単なる山遊び・野遊びになつてしまつたとし、さらに「この山籠りの帰りに、処女たちは、山の躑躅を頭に挿頭して来る。これが田の神に奉仕する徴である」と述べている。男子も同様に先達につられて霊山に登り、一定の試練に耐えることで一人前の資格を得たのだという。卯月八日は季節の重要な折り目で

あるだけでなく、人の一生においても一人前の人格を獲得する上で大事な機会とされていたのである。

鹿兒島県肝属郡内之浦町では、かつて四月三日にタケマイリといって若い男女が未婚の間は毎年近くの山に参り、ツツジを取って帰ってくる風習があった。ここでは、「国見、黒園笹尾の嶽よ、三度参れば妻たもる」の歌があつて、タケマイリは若者に結婚の機会を与えるものでもあつた。古くは『常陸国風土記』にも、筑波山での歌垣の記事がみえ、「坂より東の諸国の男女、春は花の開ける時、秋は葉の黄づる節、相携ひつらなり、飲食をもたらし、騎に歩に登臨り、遊樂びいこへり。その唱にいはいく、

つくはねにあはむと いひしこは

たがこときげは

みねあはずけむや

つくはねに いほりて

つまなしに わがねむよるは  
はやもあけぬかも

詠ふ歌甚多くして、載車するに勝へず。俗の諺に『筑波峰の会に、嫂の財を得ざれば、兒女とせず』といへり」とある。山遊びやタケマイリの風習は、古代の歌垣につながるものでもあつたのである。

卯月八日の諸行事には、仏教行事である灌仏会をはじめ、山遊び、天道花、農耕儀礼、先祖供養、成年式などの民俗、さらには修験道の峰入りや花折り習俗など多様な諸要素が複合しており、複雑な様相を呈している。春に花々の咲き乱れるのをみると、不思議と気分は高揚し、われわれの心はつい浮かれがちになる。この不定形な浮かれた気分就一定の形を与え、卯月八日の行事に集約させてきたものは、やはり青葉や花の呪力への深い信仰ではなかつたであらうか。

(天理大学)